

# 大宮台地における縄紋前期後葉～末葉の様相

近江哲

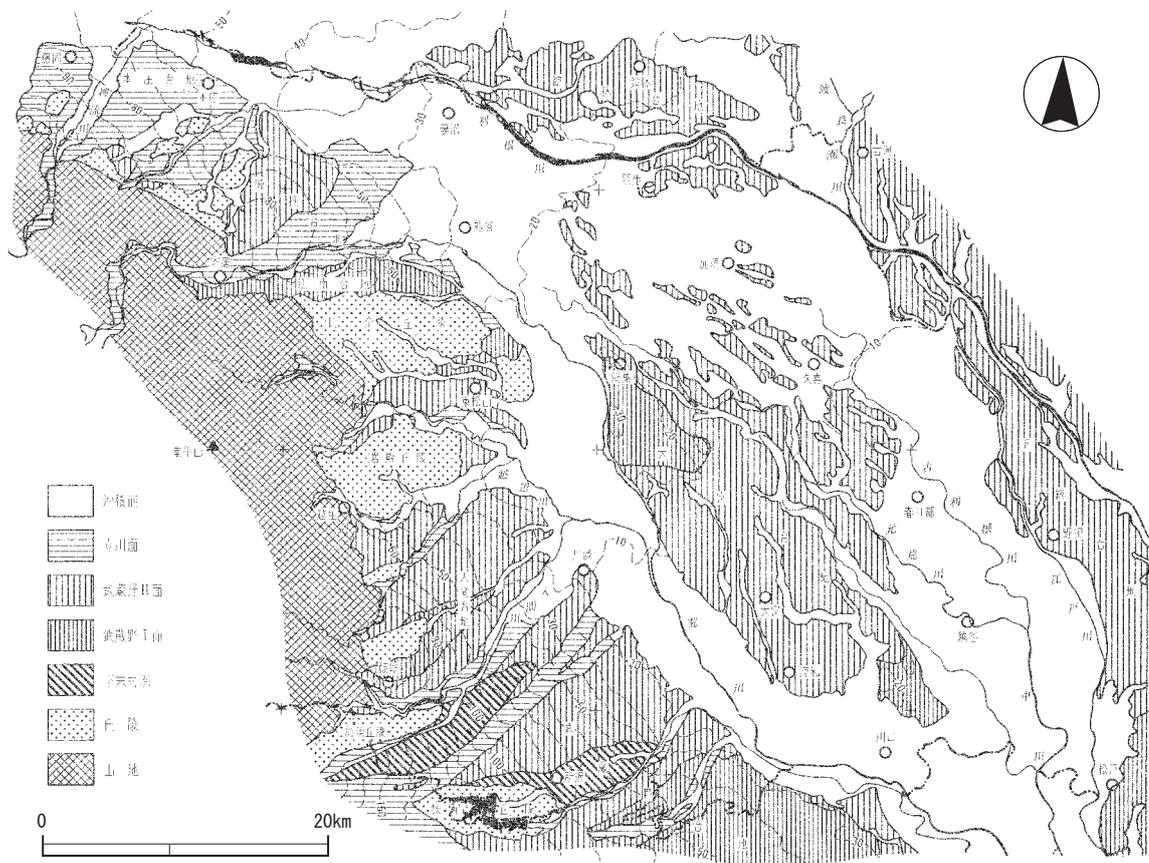
## 1. はじめに

埼玉県の大宮台地は、綾瀬川と元荒川に挟まれた台地で、多くの遺跡が所在している。縄紋時代前期後葉から末葉において、中部から関東にかけて広範囲に分布する諸磯式・十三菩提式を主体とする地域でありながらも、東関東に中心を置く浮島式との接触地域であるのが大宮台地の特徴である。どちらを主にするかは多々異論もあろうが、中川低地を挟んだ下総台地へも諸磯式が多く出土することから考えると、諸磯・浮島土器圏とも言うべき遊動的な様相が窺える。

浮島式土器は搬入された土器というよりも、むしろ当地で作られた土器と見做すべき土器も多く、その集落構成など縄民社会の動態として興味深い点が多い。浮島Ⅰa式そのものが諸磯a式にその系譜を追うことが出来るが、別型式と認められるように認識できる差異を有していながらも、両者は互いに影響しながら後続する型式へと変遷する。従前から遺跡立地、集落の変遷などが検討された地域ではあるが、低地に囲まれて浮島のようになった台地は、該期の様相については生業との関わりが深い貝塚の分布で旧海岸線を物語ってきた背景もある。

また該期以前の縄紋早期末には、気候温暖化に伴う海水面の上昇、いわゆる縄紋海進が起こる。最終氷期に侵食谷となっていた低地のみならず、谷地にも海水が浸入することで、樹枝状に開析された台地が形成される。陸続きの部分がありながらも、接触地域に海進が起こることで、土器の把握をより難しくしている。

本稿では大宮台地における各支台を概観しつつ、共伴事例とされる遺構を再検討し、併行関係などの様相の一端を検討したい。



第1図 埼玉県の地質

## 2. 大宮台地の特徴

埼玉県は八王子構造線を境として、西の関東山地と東の関東平野に大別される。さらに関東平野の中央から西部にかけて埼玉平野の中央に位置するのが大宮台地である（堀口 1986）。狭義の大宮台地と区別するために、北足立台地と呼ばれることもあるが、現在はあまり使用されていない。

洪積台地である大宮台地は、東に中川低地、西の荒川低地に挟まれており、星川～綾瀬川の谷を境として、南西部の連続した台地と、北東部の散在する台地群とに区分される。また台地の中も芝川、鴨川などの中小河川により解析されている。南北 40km、東西 12km の細長い台地を形成している。北本市高尾で最高標高約 30 m、南に従って低くなり旧大宮市の大宮主台で標高 12m となるが、鳩ヶ谷支台の川口市域で 20m と再び高くなる。範囲に加須低地にみられる地殻の沈降現象による関東造盆地運動との関係から、単純に北に向かって標高が高くなるわけではない。加えて、海進海退時の侵食作用も関わっており、台地地形の理解を難しくしている。

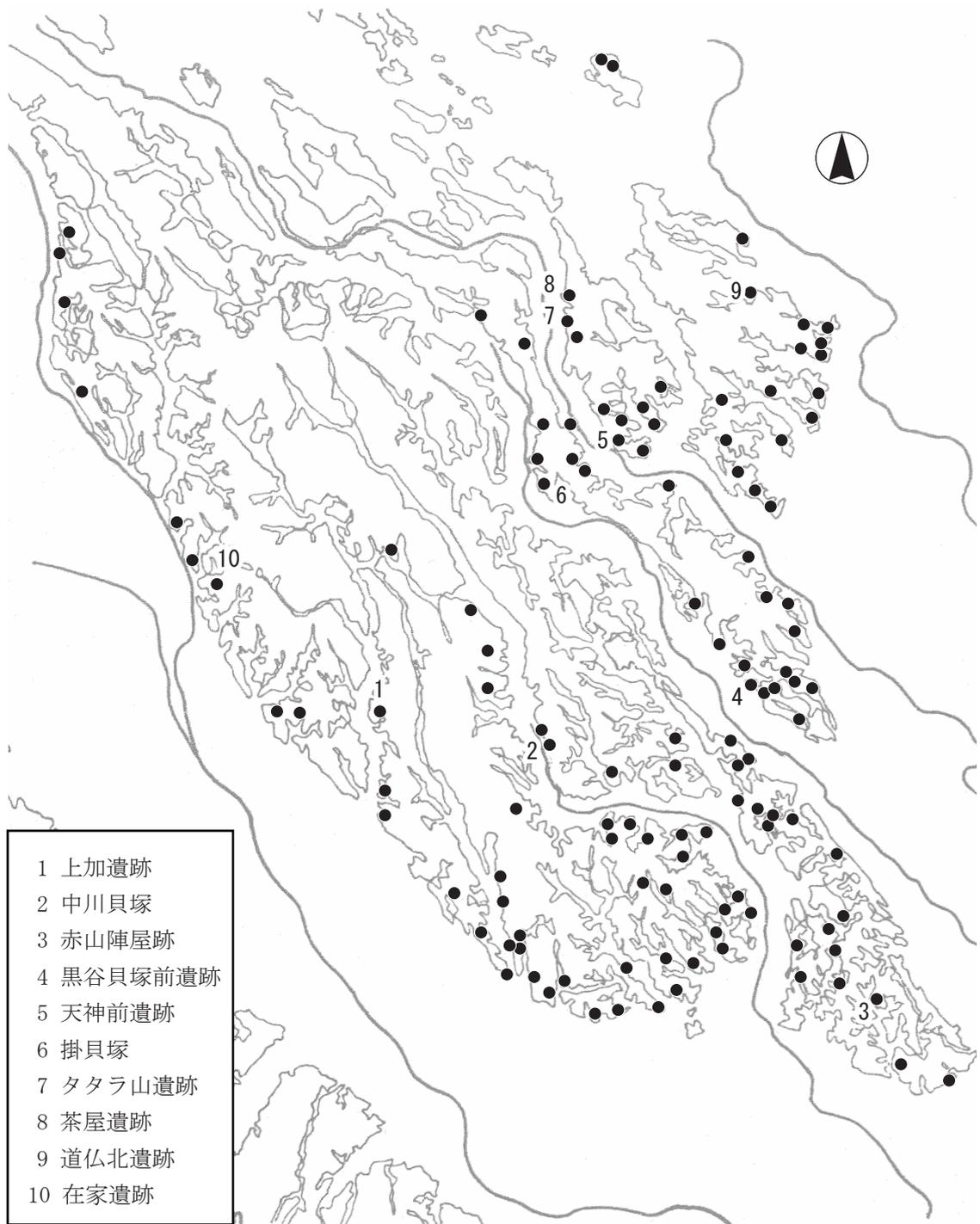
また、大宮台地の形成において欠かすことが出来ないのが、縄紋海進である。最終氷期が終わる頃、温暖化による気候変動に伴って海が内陸部へと進む現象として理解されている。一般には、いわゆる縄紋海進は縄紋早期末葉に始まり、海水面が上昇し東京湾よりさらに海進が起こり、海進のピークとなる前期中葉には、栃木県藤岡町で篠山貝塚をはじめとする貝塚群から現海水面より 50km 近くまで進入し奥東京湾が形成されたと考えられてきた（江坂 1954）。大宮台地は縁辺部が半島状にいくつも海水が奥深くまで入り込み、樹枝状の台地が形成されるが、海面上昇は地域によって違いがある。海成層の把握によって検討もされているが、実際には汽水域の問題も含めて当時の海岸線を復原する必要がある。その後、諸磯式・十三菩提式期の前期後葉～末葉にかけての時期はやや冷涼化の時期で海退する時期にあたり、該期の遺跡が減少する。集住・定住化が進み安定期と考えられる前期後葉から末葉にかけては、具体的な環境動向が考えられているわけではなく、むしろ漠然とした縄文海進期以後、と捉えている指向がある。第 3 図の遺跡分布に見られるように、該期には舌状台地の先端に集落を営む傾向があり、立地・生業により選択的に居住するのであろうが、環境変動と集落の様相については今後の課題である。

河川の開析によって各支台が形成されるが、その理解は研究者によって相違があり、一致をみない。樹枝状に開析された支台に、地象における地理学的な区分とするか、考古学的な見地を加えるかによる違いである。ただし、大宮台地南部の開析が著しい支台群に比べ、北部は広義の大宮台地として一様に捉えられる傾向が強い。便宜上、南西部の連続した台地を狭義の大宮台地である大宮主台として扱う。以下、本稿ではそれぞれの台地状況を下記の 9 支台に分けて概述する。

- (1) 指扇支台 …さいたま市西区、上尾市
- (2) 日進支台 …さいたま市北区、中央区、大宮区
- (3) 浦和支台 …さいたま市浦和区、川口市
- (4) 大和田片柳支台 …さいたま市見沼区
- (5) 鳩ヶ谷支台 …川口市、鳩ヶ谷市、さいたま市緑区
- (6) 岩槻・蓮田支台 …さいたま市岩槻区、蓮田市
- (7) 白岡・黒浜支台 …白岡町 蓮田市
- (8) 慈恩寺支台 …白岡市東部、宮代町、さいたま市岩槻区
- (9) 上尾支台 …上尾市



第 2 図 各支台の呼称



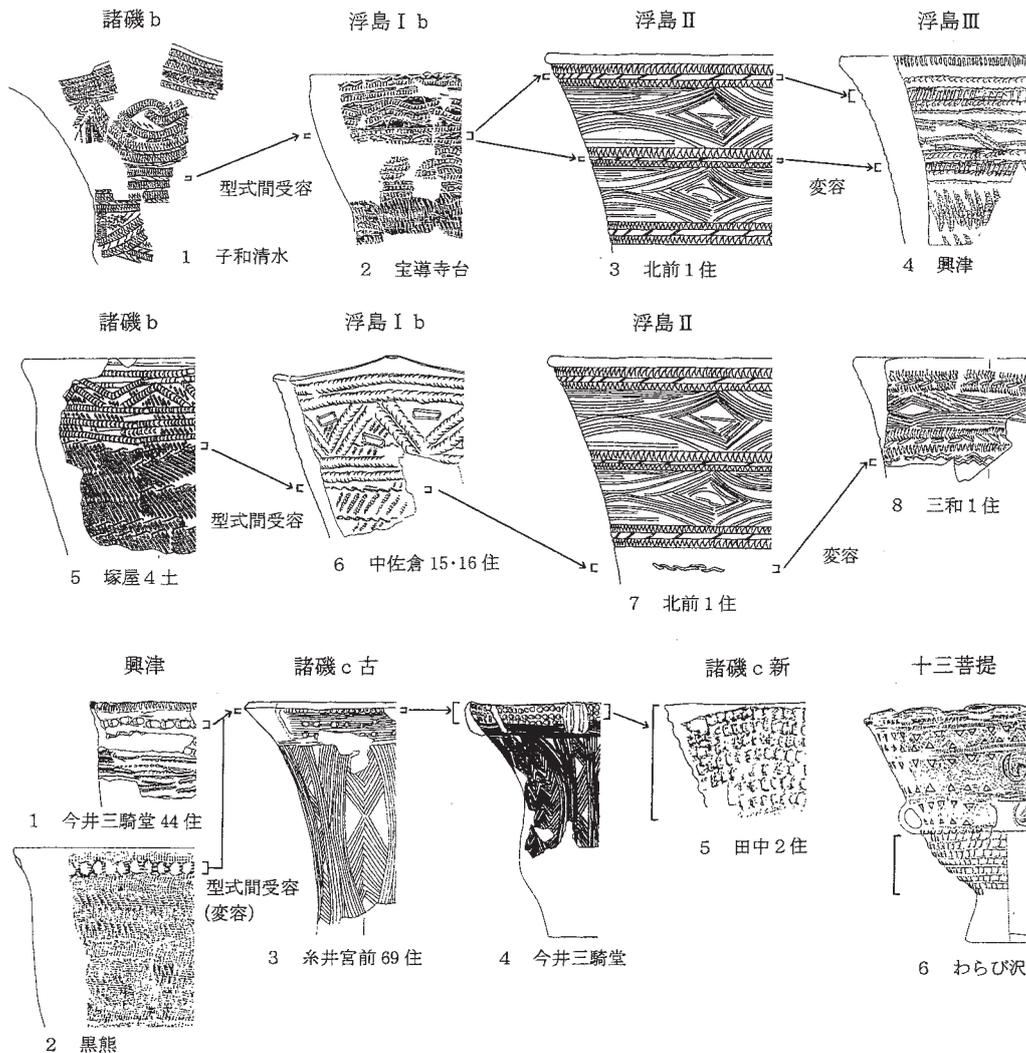
第3図 大宮台地における主要遺跡

### 3. 接触地域の土器型式

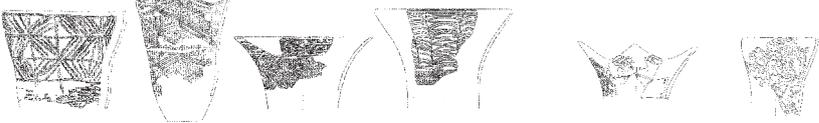
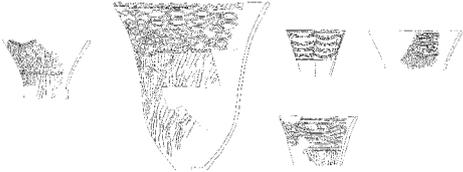
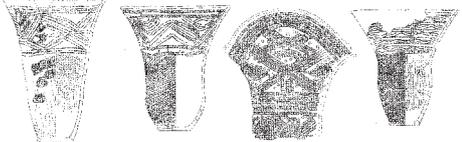
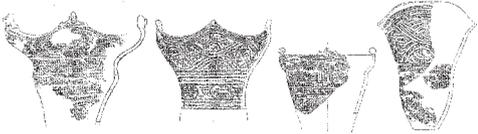
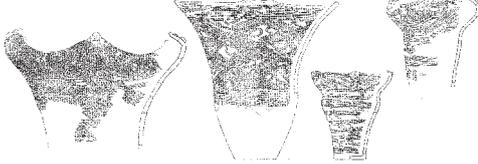
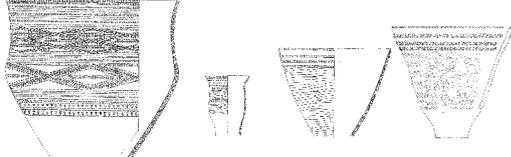
関根慎二は諸磯式の分布を関東北西部・山梨・長野を中心とし、「関東東部・北部の利根川下流域・那珂川流域では、浮島式土器の割合が多くなり、諸磯式土器と浮島土器が混じり合う」状況とする（関根 2008）。対し、浮島・興津式土器の主体分布圏について、松田光太郎は茨城県・千葉県・栃木県・埼玉県東部を中心とした東関東としている（松田 2008b）。また、両者の影響関係を検討し、第 4 図のような、文様要素における受容・変容を提示した（松田 2008a）。

関東における諸磯式と浮島式は、黒浜式の系統を引く諸磯 a 式古段階に祖形があり、地域性から西関東では諸磯 a 式新段階へ、東関東では浮島 I a 式に受け継がれると考えられている。関東を東・西に分けて検討するのも現在の行政単位による志向であるが、その境界は明瞭ではなく、先に示したように土器の出土の多寡によるものである。

以下、本稿では、前期後葉を諸磯 a・b 式、末葉を諸磯 c 式・十三菩提式、東関東の前期後葉を浮島 I・II・Ⅲ式、興津 I 式、末葉を興津 II 式・栗島台式・下小野式の一部として記述する<sup>1)</sup>。この点については、“弁別する”という作業が広域編年に立った視点から型式設定について、見当されなければならない事に立ち返る良い機会であるが、広域編年構築まで未だ緒に就く見通しが無い。現行編年の見直しを含めて検討していきたい。



第 4 図 松田光太郎による型式の属性受容と変容

諸磯 a 古段階			
諸磯 a 新段階			浮島 I a 式
諸磯 b 古段階			浮島 I b 式
諸磯 b 中 1 段階			
諸磯 b 中 2 段階			浮島 II 式
			浮島 III 式
諸磯 b 新段階			興津 I 式
諸磯 c 古段階			興津 II 式
諸磯 c 新段階			粟島台式

第 5 図 前期後葉～末葉における現行編年の併行関係

## 4. 出土遺物の検討

大宮台地における遺跡分布などの論考は数多くあり、その検討は多い。ただし、その中心は縄紋海進のピークとなる黒浜式に関する論考、河川流域ごとに検討されるものなどに集中する。

浮島式の細別が盛んになった1970～80年代にかけて、ようやく大宮台地内で東関東の影響を検討する論考が増える。浮島Ⅰ式が細別された時期に高野博光が台地内における浮島式について検討している（高野1973）。概して資料が少ない中での共伴事例を求めていた時期でもあり、小破片からの検討となっているが、早くから大宮台地の交渉を論考したものとして注目されよう。

前期末葉～中期初頭にかけて、零細な資料群から予察として大宮台地の動向を示した青木の論考は、出土量が増えた現在においても検討すべき課題である（青木1981）。早期のキャンプサイト的な遺跡のあり方から前期には定住へと変化し集落の形成にいたるはずだが、大宮台地では長時期にわたる遺跡が形成していたとは言いがたい。いわゆる集落が再び営まれるようになるのは、中期的な様相だと捉えている。

また、かつて埼玉県内における併行する関西地方からの搬入土器である北白川下層式について述べたことがある。西関東にその分布の中心を置く北白川下層式であるが、埼玉県内で確認される北白川下層域は中部からの影響が強いが搬入されたと明らかなものが多い（近江2012）。これに対し、諸磯・浮島の両者は融和的であり、遺跡によってであるが在地で作られたものと搬入されたものがどちらも出土する。諸磯a式の遺構が検出された遺跡については、大宮台地以外の状況と同じく、黒浜式から継続している場合が多い。

さいたま市の諸磯期については山田尚友が集成しており、支台ごとに遺跡の特徴を述べている（山田2005、2006、2008）。また、県東部の蓮田市・宮代町などを始めとする埼玉地区では、『埼玉の縄文前期』が刊行されており、遺跡の様相を知ることが出来る（埼玉地区文化財担当者会1999）。

以下の概要は、上記の集成・検討を参考とし、代表的な諸磯式と浮島式が遺構から出土している遺跡として遺跡について記述する。ただし、各支台の様相は、開発状況の伸展により発掘調査件数の多寡、報告書の刊行状況なども少なからず影響しており、新しい集落の発見の可能性を残したままの支台も残っているが、現況の検討としておきたい。支台では当然のことながら東関東との影響が強い東側に偏るが、西部に主体となるはずの諸磯c式・十三菩提式は全体として少ない。破片資料が散見されるに過ぎず、復元個体は限られている。これは前期末葉における多系統性の検討が足りないこともあるが、群馬県を中心とする北関東からの影響も関与しよう。気候冷涼化に伴う移動により現れる結果なのか、海退の結果として集落を転移するものなのか、検討すべき部分である。

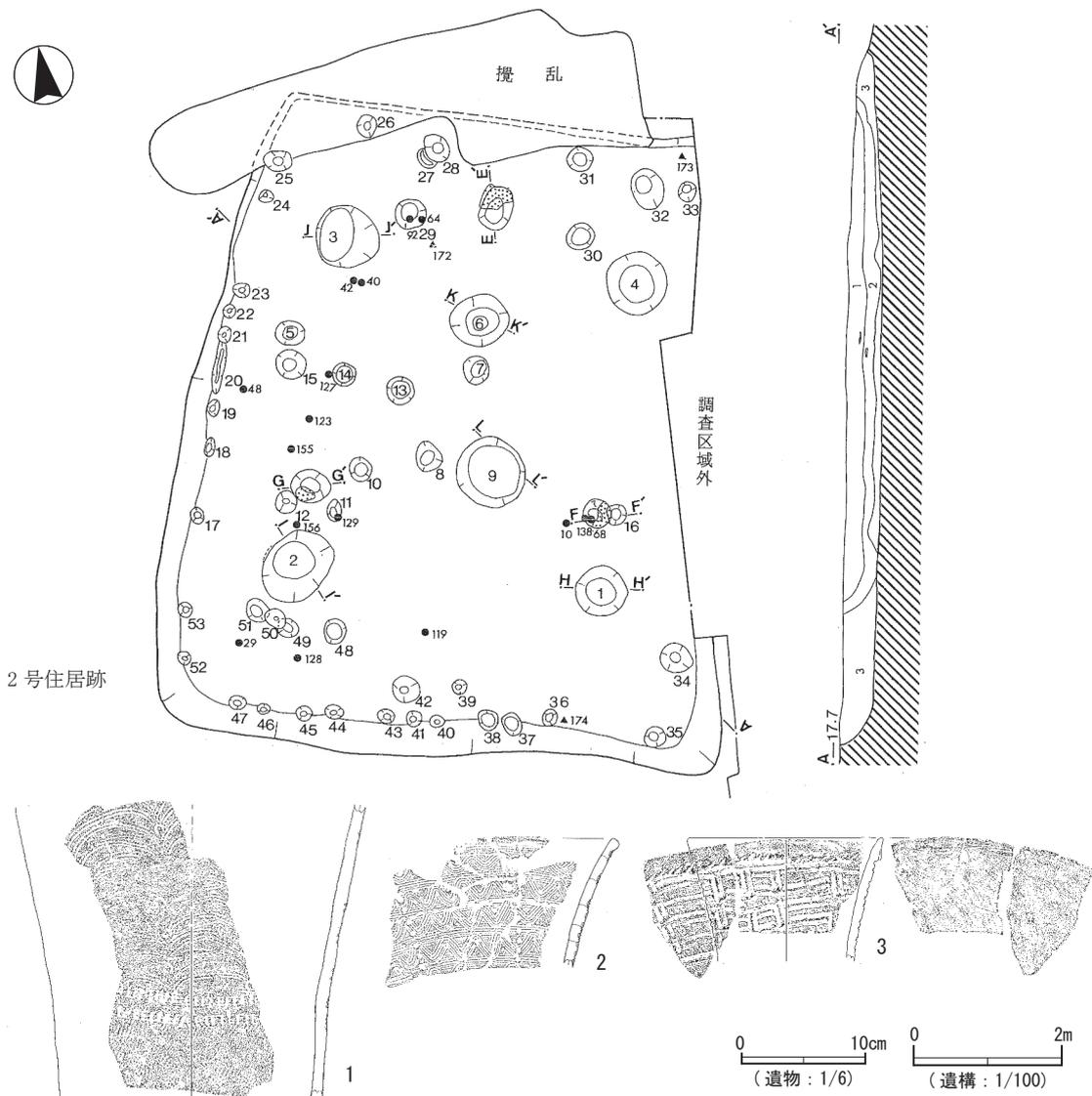
### 1) 指扇支台

大宮台地で西端に位置する指扇支台は、標高13～15mの台地上に位置する。諸磯a式・b式が出土する遺跡が多いが、遺物量としては少なく、諸磯c式～十三菩提式についてはさらに限定的である。支台西縁に位置する峰岸北遺跡では諸磯a式の竪穴式住居跡が見つっている。高木道下遺跡では十三菩提式の住居跡が検出されているも、遺物としては少量である。そのほか、大丸山遺跡や指扇下戸遺跡などでも諸磯b式～c式などが出土しているが、やはり量としては少ない。

### 2) 日進支台

さいたま市中央区・大宮区・北区にかかる支台である。旧与野市域を含み、日進与野支台と呼ばれることもある。上加遺跡・下加遺跡・側ヶ谷戸貝塚などに代表される遺跡がある。指扇支台同様に、遺物量としてはそれほど多くない。日向遺跡では、ヘラ状石製装飾品とともに十三菩提式の竪穴式住居跡が検出されている。

上加遺跡（田代・新井ほか1999）では、2号住居跡より浮島式と考えられる第6図-3の復元個体が出土したが、東関東の浮島式にはあまり見られない文様である。口縁部の輪積を突帯状に残したままキザミを施しており、器形からも浮島Ⅰb式の特徴が認められるが、平行沈線文間に縦位の短沈線を施している。報告者の新井和之が述べるように、大宮台地で作られる浮島式であろうか。住居内覆土から関山式～諸磯b式まで出土し、諸磯a式の大形破片が目立つが、堆積として一括性が認められない。



第6図 上加遺跡（日進支台）

### 3) 浦和支台

浦和支台は、開発が多く発掘件数が多い地域である。諸磯b式の土偶が出土した松木遺跡、山崎貝塚、桐谷遺跡・南方遺跡などを中心に諸磯a式～諸磯c式まで出土量も多い。特に数次にわたる調査がなされた北宿遺跡や大古里遺跡では諸磯a式～b式にかけての集落と考えられ、舌状台地先端に位置しており注目される。小谷場貝塚では浅鉢を伴う土坑墓群が検出され、太田窪貝塚では土坑から諸磯a式の良好な資料が出土している。一方で、浮島式の出土は少なく、諸磯式圈としての遺物量の多さがありながら、良好な共伴事例がない<sup>2)</sup>。

### 4) 大和田片柳支台

狭義の大宮台地に含まれることが多いが、荒川・芝川によって挟まれた地域である。台地先端部では、西側が標高16～18mであるのに対し、東側で12～13mと西高東低の傾向がある。

諸磯b式細別標示の端緒となった中川貝塚が知られる。諸磯a式～b式の住居跡が見つかった南高丸下高井遺跡や、鎌倉公園遺跡の包含層で浮島式・十三菩提式が出土した。また、宮ヶ塔貝塚では諸磯c式が土坑から単独出土している。遺物量としては諸磯a式～b式が多く出土しているが、諸磯c式～十三菩提式については西側にやや偏重する傾向がある。立地によるのだろうか。

## 5) 鳩ヶ谷支台

綾瀬川と芝川に挟まれた台地で、標高 12～20 m に位置する。特に台地南部は開析が進んでおり、樹枝状の谷が形成されている。地質として安行台地とも呼ばれる支台であり、台地先端部にかけて遺跡が数多く知られている。

東野遺跡では中期初頭の土坑が見つかり、包含層から諸磯 c 式～十三菩提式が出土した。旧石器時代～平安時代までの複合遺跡である吠原遺跡では包含層中から十三菩提式土器が出土している。また、江戸時代の赤山陣屋跡では前期末葉の土器が出土した。特に粟島台式と思しき折り返し口縁に押圧縄紋を施す土器があり、注目される。押圧縄紋は上下に円弧状をなし、菱形区画を形成している。中野田前原遺跡は、溺れ谷が入り組んだ舌状台地に位置している。諸磯 a～b 式住居跡と考えられている 7 号住居跡北東部から検出された 33 号土坑より、浮島式が出土している。土器が底面よりやや浮いた状態で出土しており、土坑墓の可能性もある。凹凸文を施文した折り返し口で、胴部は貝殻条痕文を縦・斜位に施文する。また、土坑内からは 2 点の諸磯式が出土しており、1 点は半截竹管文による平行沈線と円形刺突を縦位に施文する諸磯 a 式で、もう 1 点は半截竹管文による諸磯 b1 式（古）と考えられる。

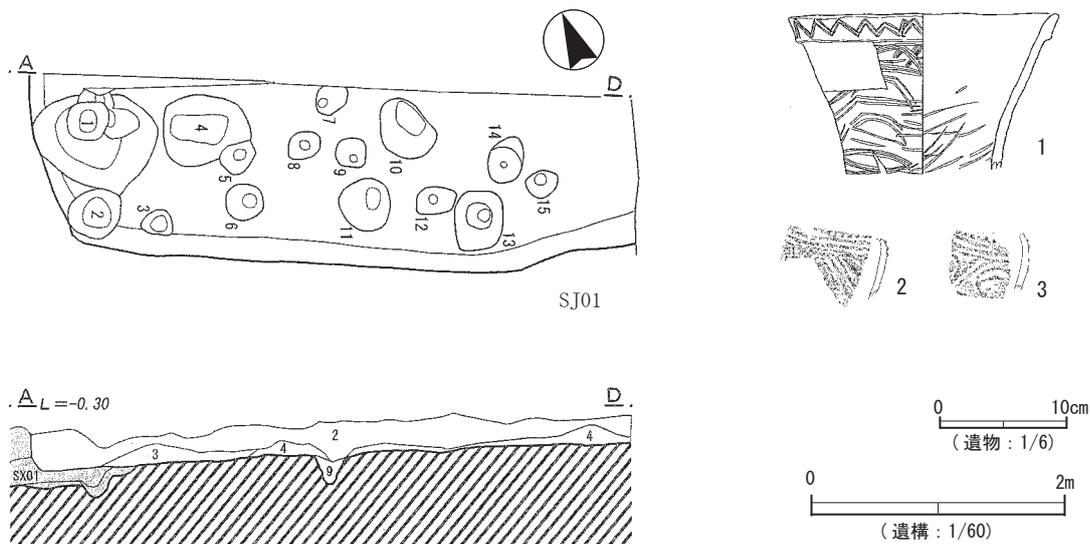
## 6) 岩槻・蓮田支台

綾瀬川と元荒川に挟まれた南北に細長い標高 13～16 m の台地で、南東部で狭くなり蓮田支台と岩槻支台に分離される狭義の大宮台地東端の台地であり、学史上では関山式の標識となった関山貝塚などが知られている。分離される附近でやや標高が高くなるが、12～15 m ほどである。

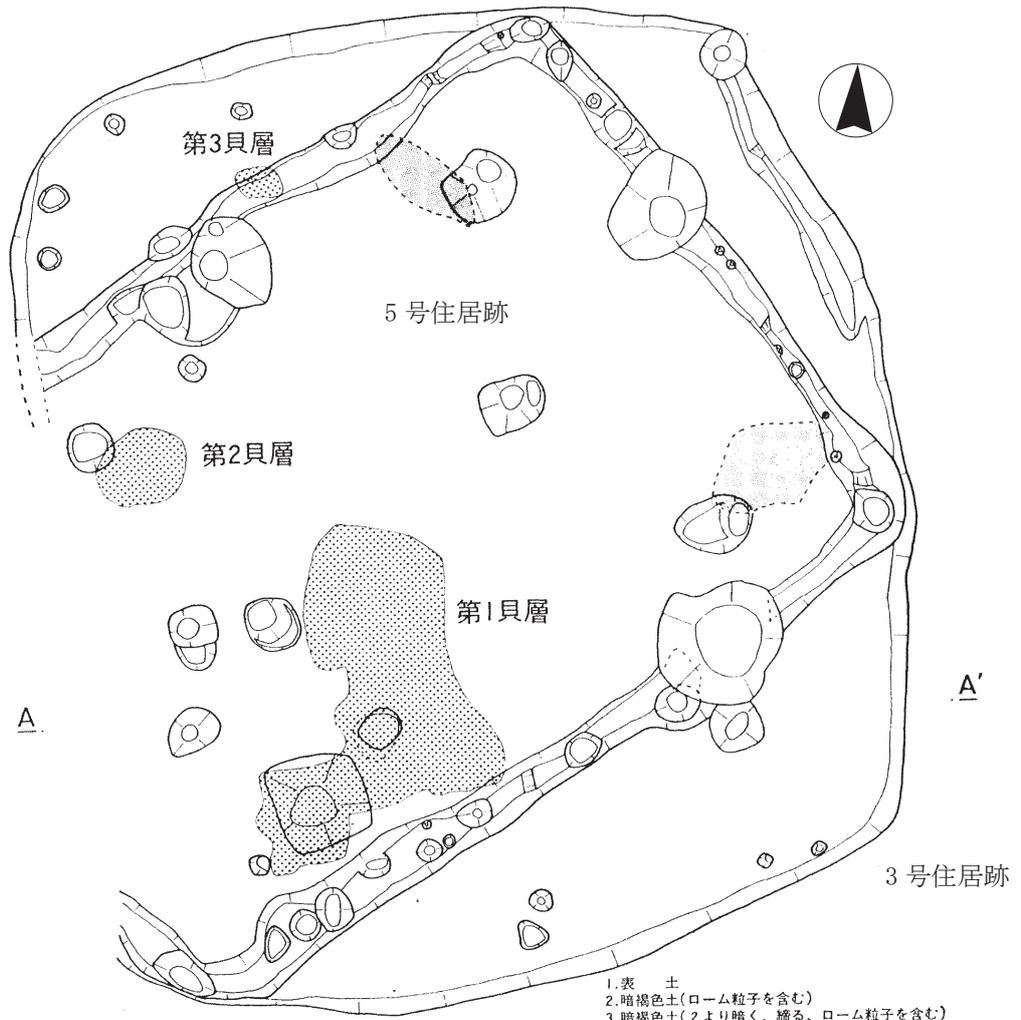
黒谷貝塚前遺跡の SJ01 から浮島 I b 式が出土している。床面周辺の遺物から黒浜～諸磯 a 式の竪穴住居跡と捉えられているが、遺物は黒浜式・諸磯 b 式である。第 7 図-1 は、折り返し口縁部に鋸歯状沈線文が廻り、胴部の平行沈線文は木葉文の崩れとするべきか迷うところである。

さいたま市岩槻区の掛貝塚では縄紋前期の竪穴式住居跡が 5 軒検出されており、岩槻市史によって写真で報告されていたが、「埼玉の縄文前期」によって図化がなされている。2・6 号住居跡では、方形プランの住居跡が重複し、6 号住居跡がより下面で確認され、住居の拡張の可能性も示唆される。3・5 号住居跡も同様に重複しており、諸磯 b 式（古）～（新）が出土している。

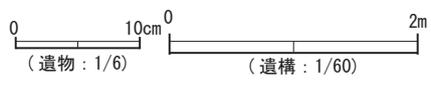
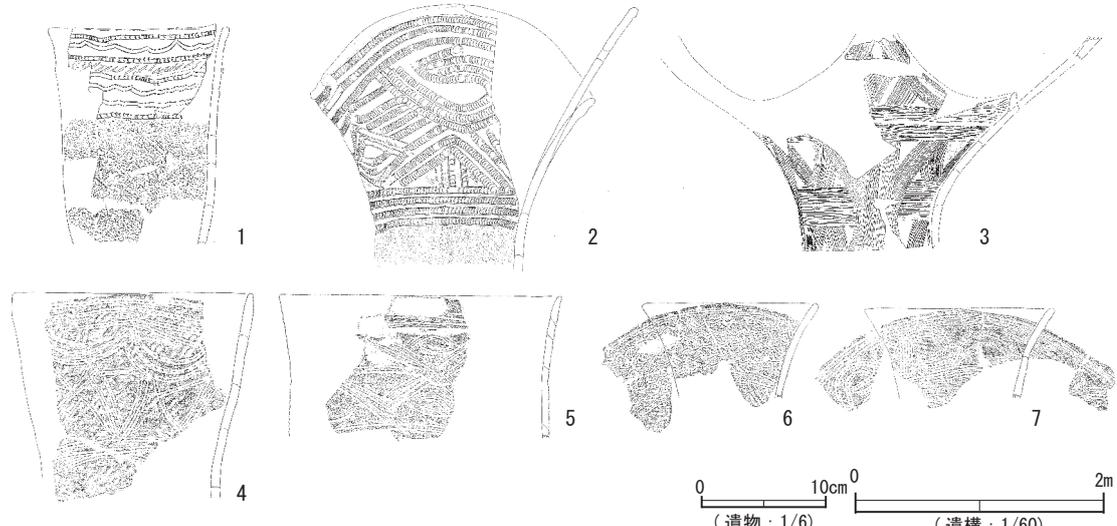
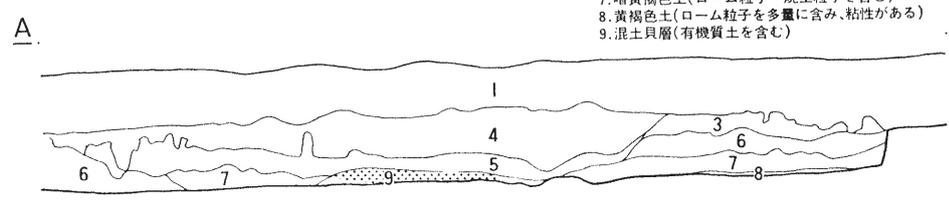
第 8 図-1 は、浮島 I a 式に比定されようか。撚糸紋を地文とし、口縁部・口辺部に廻る隆帯間に、緩やかな波状文が施文される。隆帯下の胴部には、2 段の波状爪形文が施文される。3 号住居跡の覆土から貝層が見つかり、諸磯 c 式期に伴うマルタニシブロックが検出されたとあるが、『岩槻市史』中の言に従うと諸磯 c 式は第 8 図-3 の土器が出土したのであろう。靴先形状の口縁を有しており、諸磯 b 式（新）から過渡期にあたるような器形であるが、縦位に区画された胴部には集合沈線によっ



第 7 図 黒谷貝塚前遺跡（岩槻支台）



- 1.表 土
- 2.暗褐色土(ローム粒子を含む)
- 3.暗褐色土(2より暗く、締る、ローム粒子を含む)
- 4.暗黒色土(締りが無い、ローム粒子を含む)
- 5.暗褐色土(ローム粒子・黒色ブロックを含む)
- 6.暗褐色土(ローム粒子を多量に含み、締る)
- 7.暗黄褐色土(ローム粒子・焼土粒子を含む)
- 8.黄褐色土(ローム粒子を多量に含み、粘性がある)
- 9.混土貝層(有機質土を含む)



第8図 掛貝塚(岩槻支台)

て文様が描かれている。6は平行線に挟まれた文様帯に5条の波状沈線が廻る。

## 7) 白岡支台・黒浜支台

白岡支台は元荒川と旧日川に挟まれており、蓮田市黒浜貝塚が所在する台地である。支台には諸磯a式～b式にかけての良好な資料が多く残されている。

天神前遺跡では諸磯b式と興津式が伴出している事例があり、12号住居跡・24号住居跡で興津式が出土している。幅狭な文様帯に沈線による菱形が描かれるが、文様帯に区画される三角の空白部に縦位の沈線で施文するのは諸磯式の規範をうかがわせる。12号住居跡と24号住居跡の興津式は近接した時期だが、時間差があると考えられる。24号住居跡の第9図-2の興津式は口縁部に縦位キザミ、半截竹管による結節平行沈線、凹凸文3条の下位に、主体となる菱形平行沈線文が描かれる。住居床面よりやや浮いた状態で出土した2個体の諸磯b式は、爪形文と円形竹管文が空白部を埋めるために施文されており、やや古手の様相を呈している。もう一方は平行沈線によるが、胴部がやや膨らむ器形の諸磯b2式であり、時間差がある。時間差をもって堆積した様相をうかがわせる。

24号土壙では諸磯b2式(新)と興津I式が伴出している。深さ18cmの皿状の底面を有しており、伴出した資料として注目される。興津I式は口縁部に縦位沈線を施し、胴部には三角文が施されている。諸磯b2(新)式は浮線文による風車状渦巻文が描かれ、浮線の上に縄紋が施されている。また、獣面突起の退化した貼付文が施されている。興津I式は、胴部がやや膨らむキャリパー形の崩れた器形をしている。変形爪形文を施文するため、浮島Ⅲ式の新相か、興津I式でも古相にあたると思われるが、ひとまず興津I式としておく。

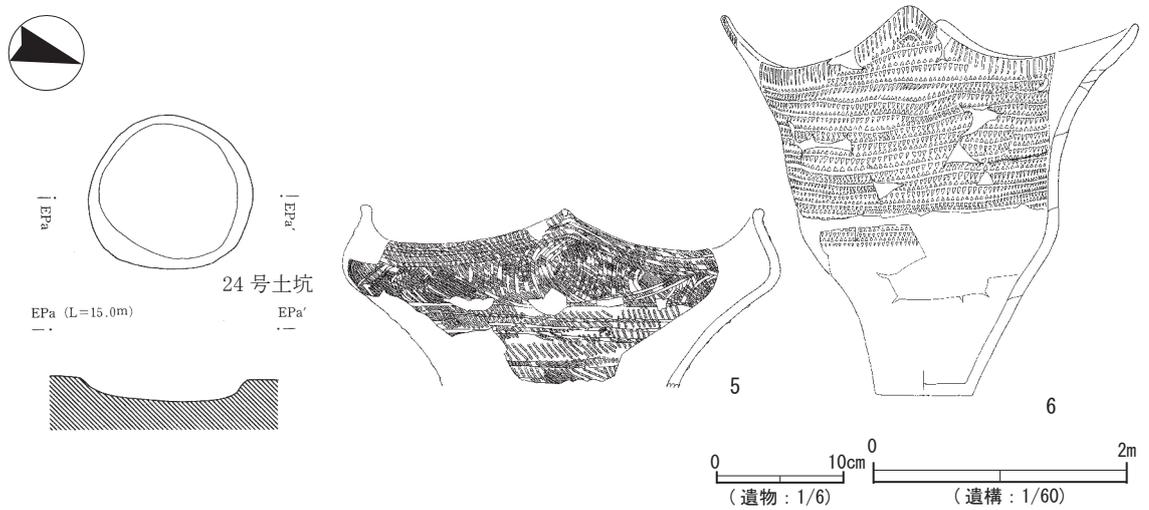
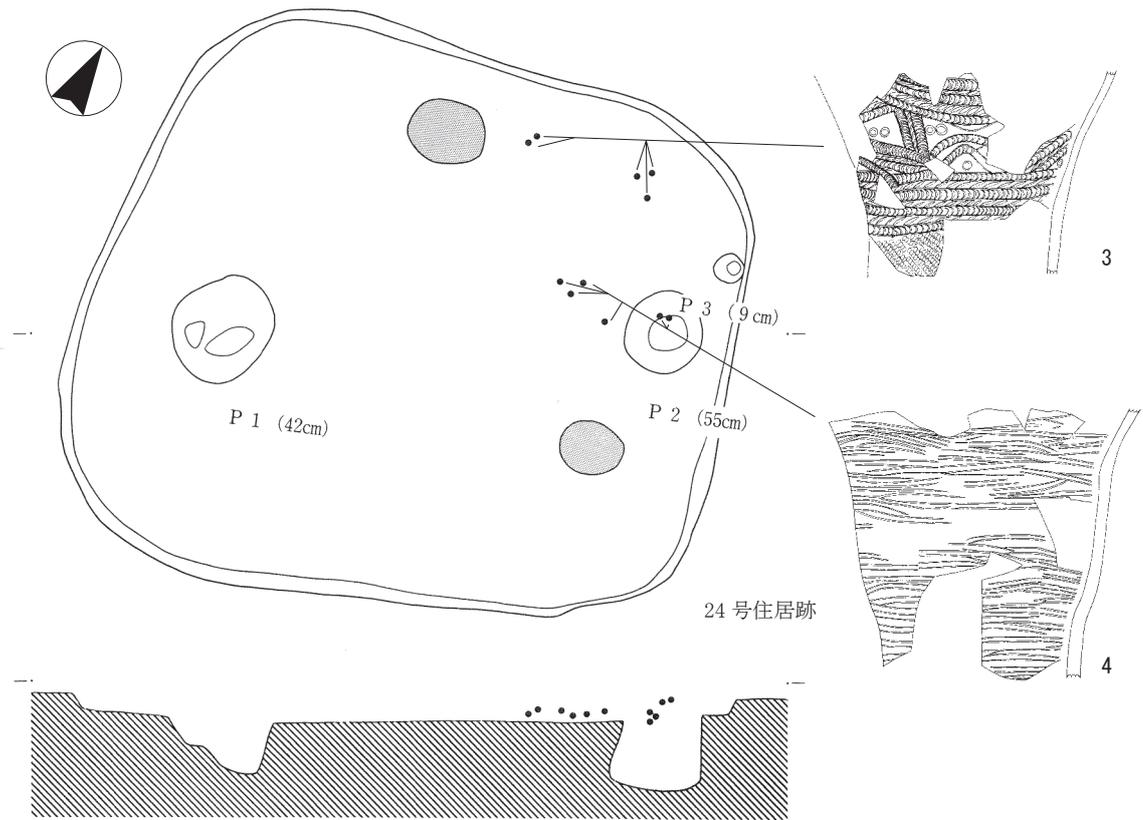
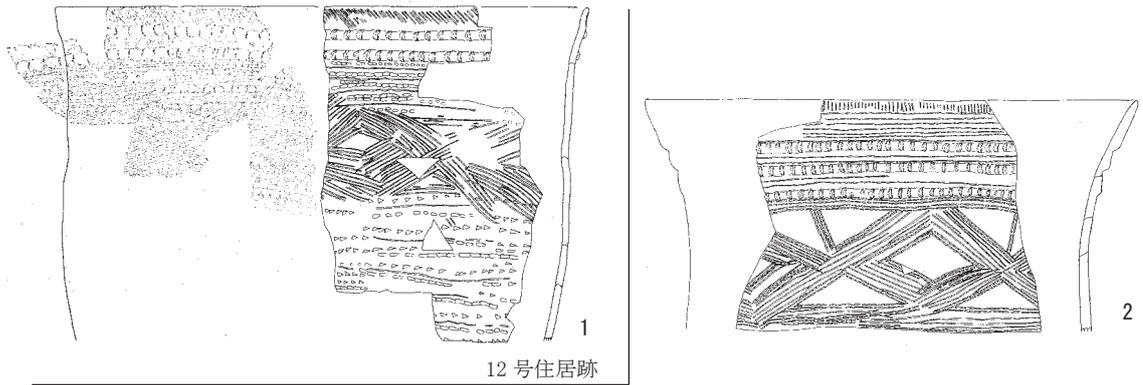
茶屋遺跡では、6号土坑と1号住居跡より諸磯式と浮島式が出土している。1号住居跡出土の土器は、1条の変形爪形文と2段の波状貝殻文によって多段に構成される浮島式と、波状貝殻文が胴部に施文される浮島式の2点である。これらは住居跡の壁際南東からまとまって出土したことが記されており、一括に廃棄され浮島。6号土坑は、底部を欠く諸磯b式は土圧によって壊されており、内部から浮島式が出土したとある。口縁部の輪積痕に凹凸文を施文した破片である。第10図-7の土器については鈴木敏昭によって、展開図とその考察が行われており、浮島式の分帯構造に注目し、諸磯式に通有な分割構造を欠く視点が重要である(鈴木1984)。茶屋遺跡例は浮線文による諸磯b式も多いが、全般に沈線文を主体とする多段構造をもつものが多く、南関東における諸磯式の特徴を良く現している。これらは、浮島式との接触により変容していく様相が考えられる。また桶川市前原遺跡の甕被り葬における検討から、茶屋6号土坑についても土坑墓と捉える見解がある(宮井2010)。

タタラ山遺跡第1地点では、8号土坑から諸磯b式と浮島式が出土している(奥野1987)。径2mの大形土坑であり、三角堆積が認められる点から自然堆積と考えられる。2層から大形破片が出土しているが、1層とさほど時間差を置かず埋没したのであろう。器形の判然としない土器片は早期の条痕文から同時期の渦巻文様の諸磯b式と比べると口縁部の開きがやや弱く、古手の様相にも思われるが、浮線文上のキザミは矢羽根状であり、b2式とすべき個体である。また、2点出土したうち、1点は6段にわたる変形爪形文は施文され、胴部下位には波状貝殻文が施文される。同時期とするにはやや時間差があり、出土した浮島Ⅱ式と諸磯b2式が併行関係にあるとするには躊躇があるが、浮島Ⅱ式の器形は諸磯式の影響を強く受けキャリパー形となっている。

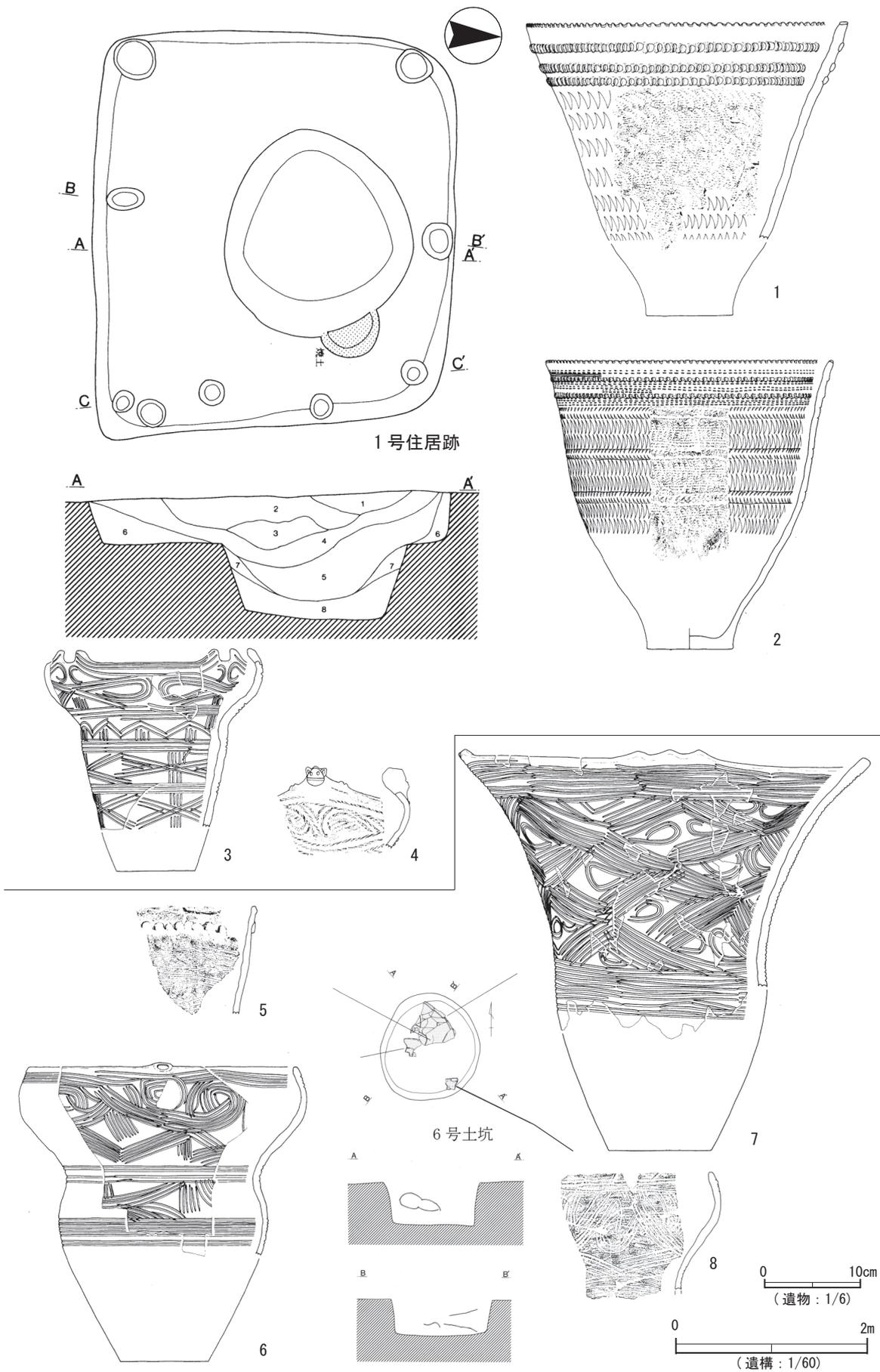
## 8) 慈恩寺支台

広義の大宮台地最東部にあたり、古利根川によって複雑に入り込む谷地が形成され、南部ほど開析が進んでいる。南北に長い台地地形であるが、南部ほど標高が高く18mほどである。台地縁辺部にかけて遺跡の分布が多くみられる。徳力東北遺跡では諸磯a式・b式それぞれの堅穴住居跡が検出されたほか、諏訪山貝塚でも諸磯b式の住居跡が検出された。

宮代町道仏北遺跡は大宮台地の最東部にあたり、古利根川の氾濫による自然堆積層が薄く堆積している(河合・青木2014)。調査で44軒の堅穴住居跡が検出され、平成20・21年調査の重複する9・11・17号堅穴住居跡より第12図-1の興味深い土器が出土している。11号住居が黒浜式、17号住居が早期条痕文期と考えられ、重複しているが、9号住居跡が最も新しい。住居跡内覆土からは



第9図 天神前遺跡 (白岡支台)



第10図 茶屋遺跡(白岡支台)

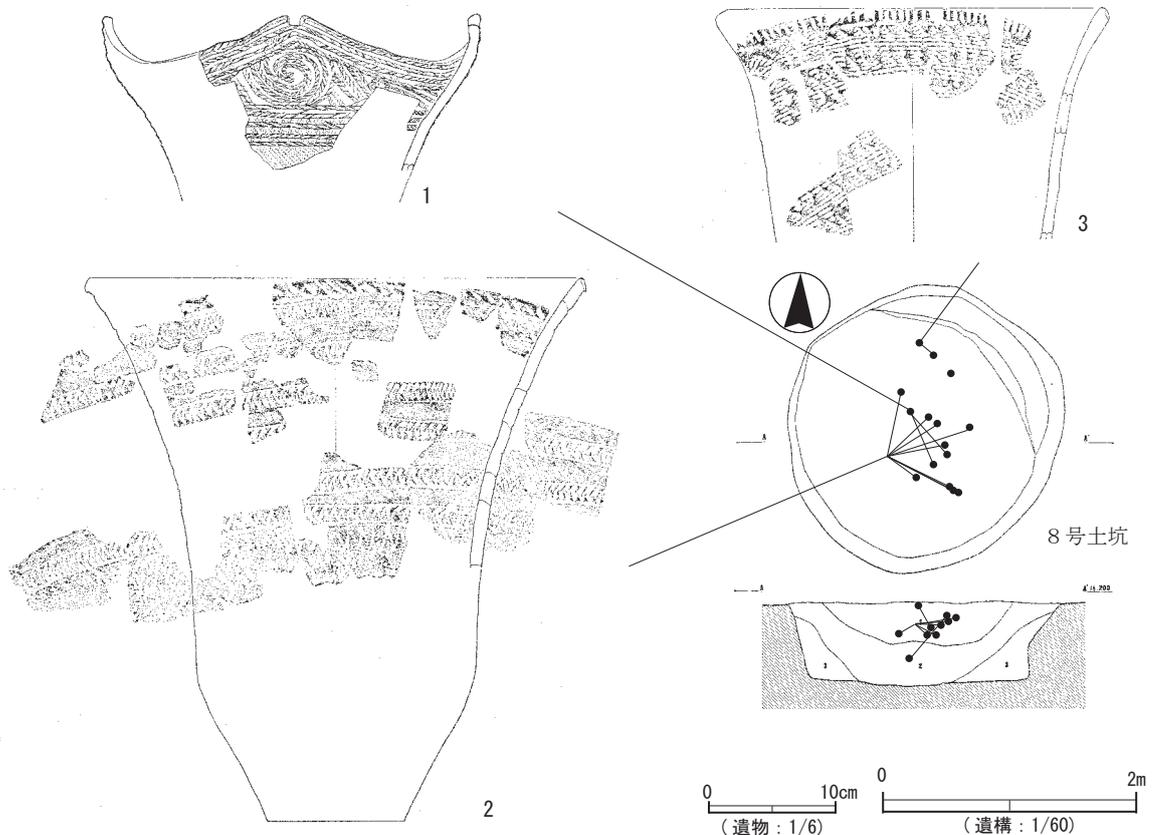
早期中葉～中期初頭まで混在しており、9号住居と11号住居跡の層厚差は5cmである。

口縁部から上半にかけては、沈線文に区画された文様帯内を縦位の矢羽根状集合沈線で施文、諸磯c式～十三菩提式で通有する施文技法である。一方で諸磯c式に特有の貼付文はなく、十三菩提式の古段階であろう。しかし、胴下半にかけての凹凸文は、浮島・興津式に見られる施文技法である。諸磯c式に見られる凹凸文は、竹管状工具によることが多い。浮島・興津式の影響とするか、文様下半を折衷的なものとするか見解が分かれるところであろう。また廃棄の一括性としては疑わしいが、9号住居跡より興津Ⅱ式も出土している。大きく内傾するように復元されているが、胴部が張り出し、口縁部がやや外反する興津式によく見られる器形と想定される。同様の集合沈線文をもつ土器として、グリッド出土ではあるが、第12図3・4の前期末葉の2点の土器が報告されている。

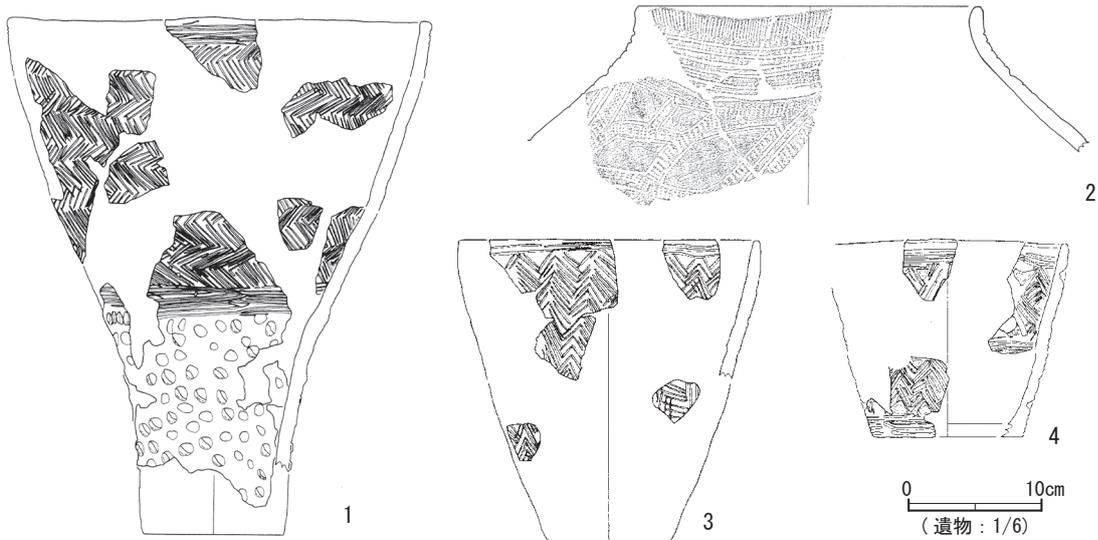
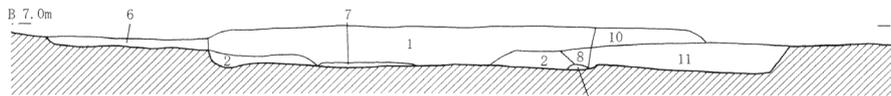
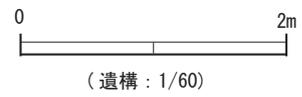
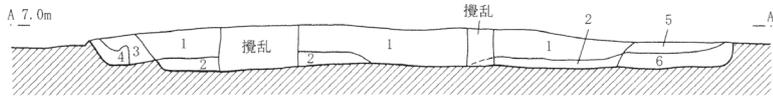
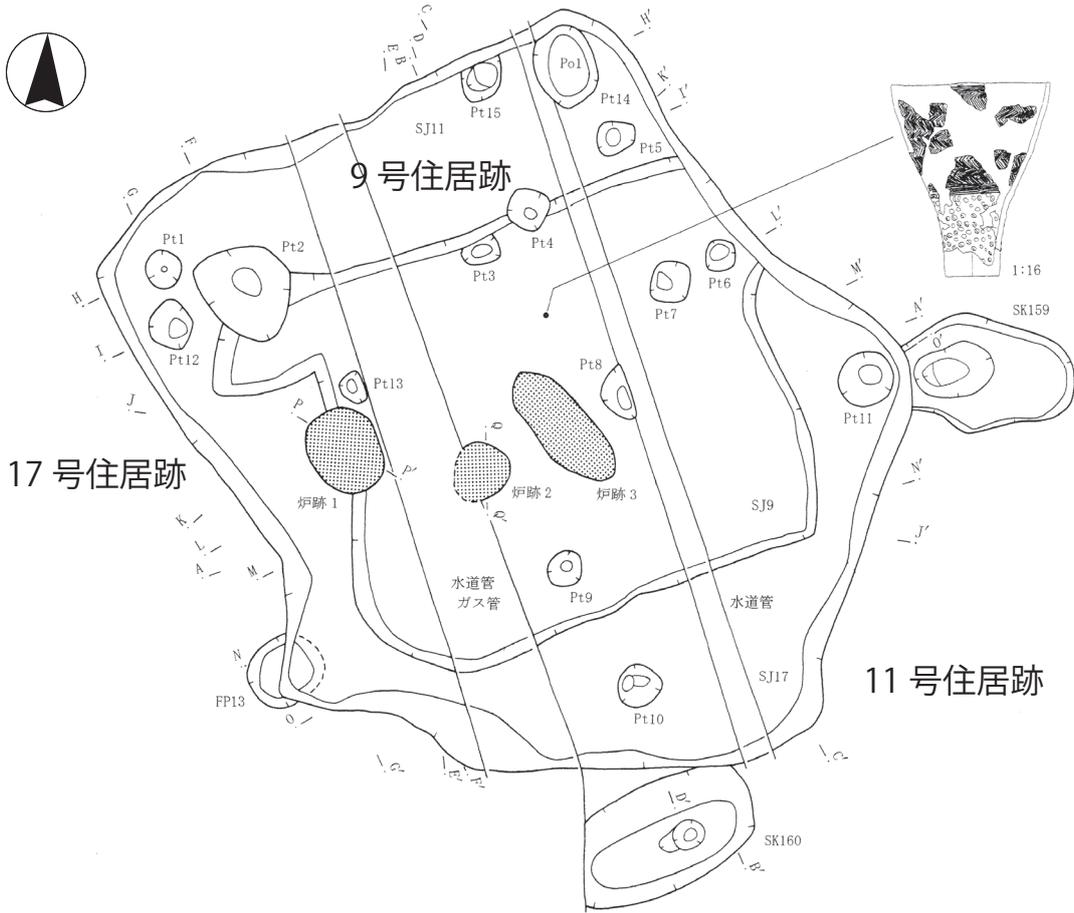
### 9) 上尾支台

標高15mの台地で、上尾市域では芝川・鴨川により東・中・西部の各支台にさらに分けられる。西部地区に該期の遺跡が多く、諸磯c式が出土した西通Ⅰ遺跡、十三菩提式の竪穴式住居跡が検出された箕輪Ⅰ遺跡が知られる。二十一番耕地Ⅱ遺跡では、大宮台地では珍しい結節沈線による双渦紋が施された諸磯c式が出土しており、大宮台地北部の特徴といえる。また、市史編さんに伴い調査された上尾市平方貝塚調査により、縄紋海進期の環境復元がなされるなど、明らかになっていない大宮台地北部の様相を知るうえで貴重な遺跡がある（細田ほか1992）。

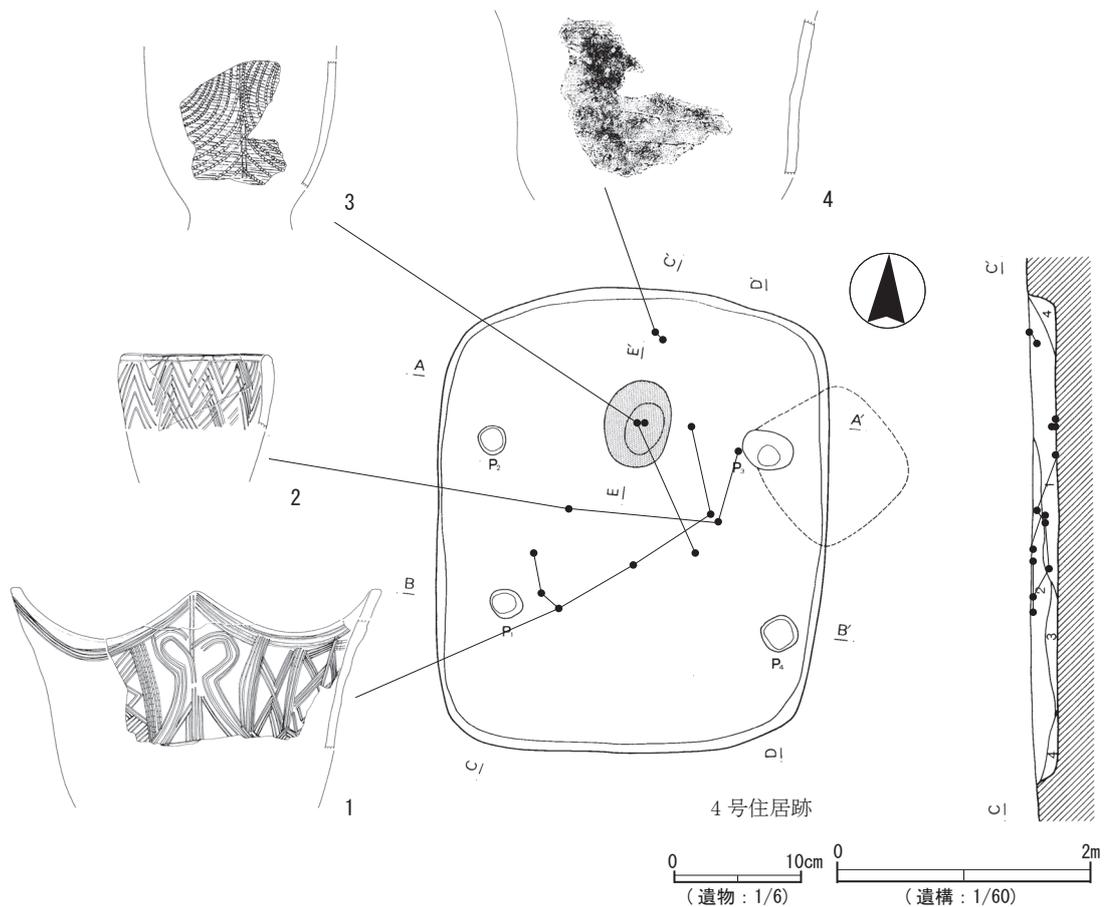
在家遺跡は、4号住居跡より前期末葉の諸磯c式がまとめて出土したとされ、調査担当者の細田勝によって、詳細な検討がなされている（細田1996）。縦区画内に直線・曲線による文様が描かれた、第13図-1は諸磯c式であろうが、本来的に胴部に見られる文様である。結節浮線紋によって対称な崩れた渦巻紋を施す例などは諸磯c式の特徴による。破片資料であるが、諸磯c式～十三菩提式が出土しており、興津式も確認される。北関東に連なる大宮主台北西部において、在家遺跡は縄文時代早期から連続する遺跡として重要である。



第11図 タタラ山遺跡（白岡支台）



第 12 図 道仏北遺跡 (慈恩寺支台)



第13図 在家遺跡（上尾支台）

## 5. まとめ

東関東にその主体を置く浮島・興津式は、地理的要因によって千葉・茨城県に近い大宮台地の東部に多く出土する傾向にある。青木が「東関東という場合、下総台地から中川低地を渡って最初にたどりつく台地が大宮台地（特に岩槻・鳩ヶ谷支台）」（青木 1981）である事を視座に入れていたように、分布においてその出土状況は現在でも同様である。一方で、低地を挟んで位置する下総台地でも諸磯式土器圏としては集落を形成していたようである。

山田がすでに指摘しているように、発掘面積が小さいため集落としてはさいたま市域で把握されている箇所はあまりない（山田 2006）。これは大宮台地全体でも同様である。調査数の増加によって集落が増える可能性も有るが、限定的な定住を続けた可能性の方が高く、第3図のように舌上台地の先端部に遺跡分布が偏っている。黒浜式～諸磯a式、またb式までの間は時期も連続して出土する遺跡が多いが、その後の末葉にかけては連続する地域としない地域の差異が明瞭である。また、諸磯a式～c式までの間に集落が継続している場合もあまりなく、気候変動によって海退が進む中、集落の様相も変化していったであろうことが予想される。この点については、貝塚の在り様、生業形態を考えるなど動植物相の位相も含めて検討していく必要があるだろう。

続き、併行する土器型式を考えると、浮島I a式～I b式の出土は少ない。この事実は東関東で別の系統となった浮島式が西部地域である大宮台地まで到達しない、とすることも可能であろうが、実態としては諸磯a式からの変遷において、文様としてこの段階の諸磯式と浮島式が分ちがたい端境期にあたることも関与しよう。後続する浮島II式～III式は貝殻紋の発達が顕著であり、小破片でも看取することが可能である。他方、大宮台地で在地として作られた浮島式が、一型式としての地域型式としてその特質を把握できるように、伝えられる文様としての情報が異なっているのもまた事実である。この点は、土器に現れた異系統間の受容と変容について松田が論じた（松田

2008a) ように、異系統としての浮島式を理解するために、在地か搬入かの問題も含めて、両者の違いを胎土分析などより多方面に把握していく必要がある。この状況は諸磯 b 3 式に併行する興津 I 式まで同様である。

前期末葉にかけては、冷涼化により遺跡・遺物ともに減少する傾向が増す。諸磯 c 式は単発的な出土例が目立ち、前期後葉よりさらに動態の把握を難しくしており、十三菩提式の様相はさらに複雑である。この時期は遺跡の減少化傾向が認められ、十三菩提式も零細であり、陸続きとなった当地には、定住性集落として存続しなかったのであろうか。

前期末葉に関しては、出土事例が増えたといえ未だ細別において異論も多く、不明な点も多い。特に東関東に特化した論考は文様に乏しいこともあり、小林謙一(小林 1991)、松田光太郎(松田 2000)以後、今村啓爾により「東関東前期末の編年」の中で「在地の粗製土器には型式の特徴が乏しく細かい時期比定が困難」とし、「これに伴う異系統土器で時期判定を行う必要」(今村 2010)があるのが現状である。大宮台地は接触地域でありながらも現状は同様であり、東関東を主体とする粟島台式～下小野式の出土が限定的である。遺構からではなく包含層・またはグリッドなどから出土した零細な資料群によって検討がなされている。また、この時期の特徴なのか、土坑墓のように単独で土器が出土するケースが多く、併行関係をたどることが難しい。

加えて、粟島台式を前期末葉における粗製の一群とみなすことも可能だが、その場合に興津式から系統を残す“精製”の土器はどのように変遷するのであろうか。前稿で扱った文様性に富む興津式からの変遷も含めて、系統を明らかにして行く必要がある(近江 2014)。本稿で俎上とはしなかったが、鶴巻式も該期における大宮大地のパラエティとしての地域差であるのかもしれない。

末に、本稿での併行関係を参考に遺跡からの共伴事例を検討した結果、現行での大宮台地編年試案を掲載しておきたい(第 14・15 図)。各型式の段階を細別する必要があるが、大宮台地のみでは限界があり、現況を示すにとどめる。

## 謝辞

本稿は当初、大宮台地における浮島式・興津式の分布を捉え、東関東の縁辺より最西端の様相を企図したものであった。しかし、実際に集成をはじめると、案外に破片資料の断片的な状況しかつかむことが出来ない。しかも、1980 年代より数量だけは増加しており、かえって分布図として示すには煩雑な様相となっていることが窺われた。そこで、急遽に浮島式と諸磯式の関係に絞って、遺構内出土の検討を始めた。しかし、現在までに共伴とされ編年の指標資料とされている例に立ち返ると、一括廃棄の問題とその関係性の理解に苦しむ点が多々あった。課題ばかり残す形となったが、少しずつ検討していきたい。

いつも以上に筆が進まないせいで柳澤清一先生にまたまたご迷惑をおかけしてしまった。輪を掛けて校正で小林嵩氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。

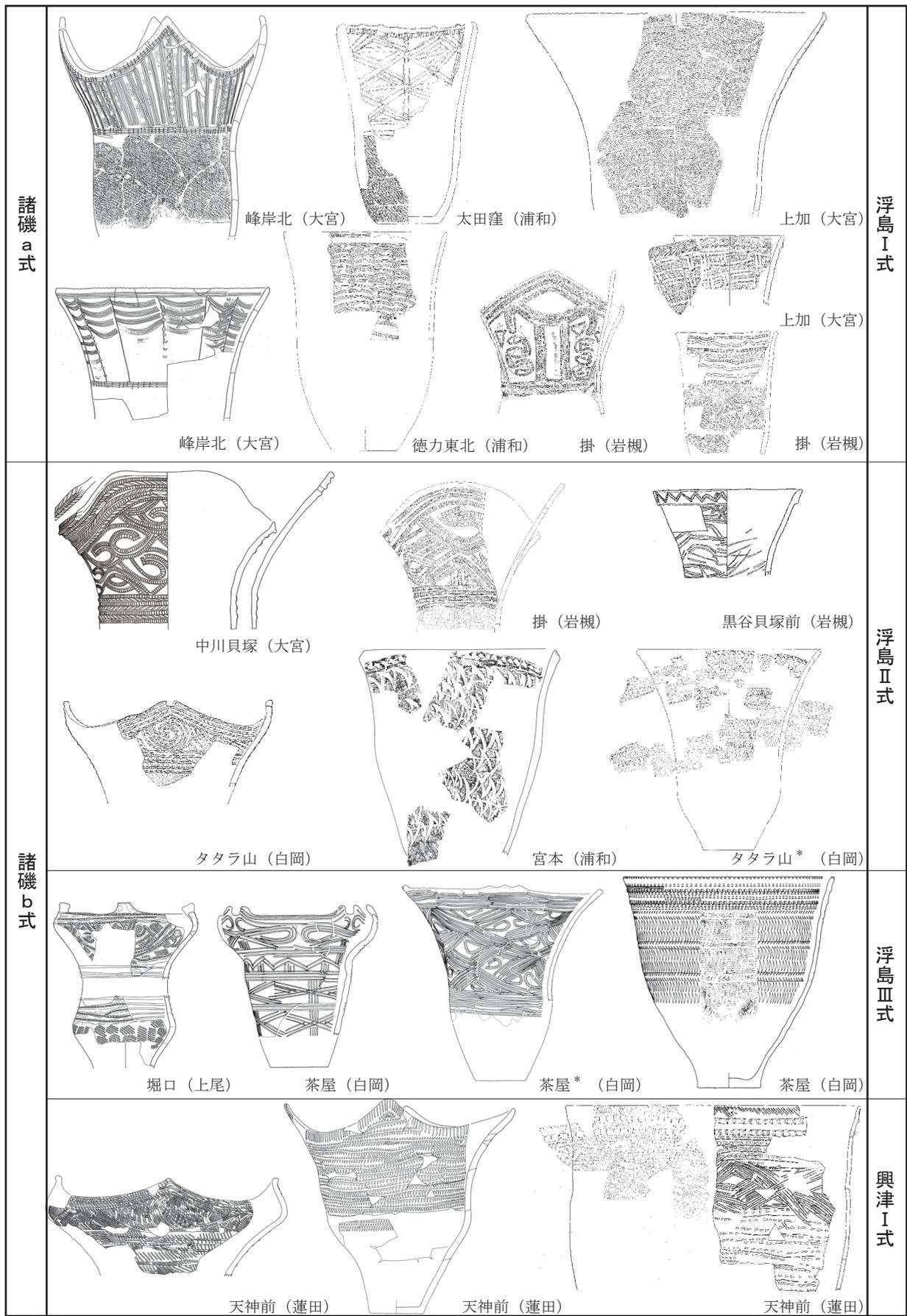
## 註

- 1) ただし、下小野式に関しては中期初頭まで下るものもある。下小野式を中期初頭とする見解から長く経つが、その根拠に乏しい。今村啓爾が指摘するように、粗製土器として型式としても前期末葉～中期初頭にまたがる可能性が高い。一方で、下小野式が文様に乏しいため、その全容が定かではなく、貝殻文を主体とする浮島・興津式がどのように変遷するかという点については今後の論証が待たれる。
- 2) 旧上福岡市鷲森貝塚は荒川低地を挟んだ対岸にありながら浮島式の住居跡が見つかっている。

## 参考文献

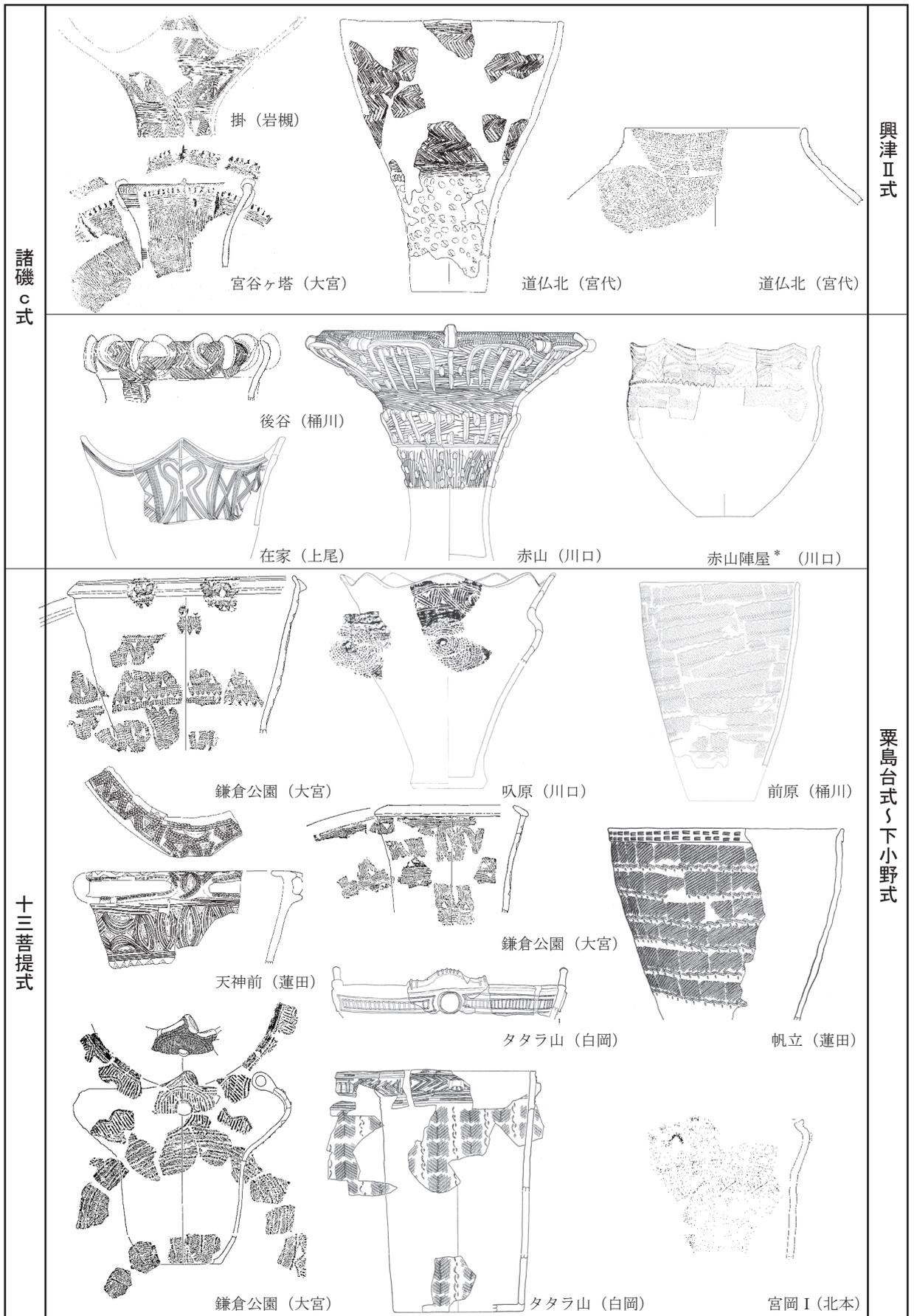
- 青木義脩 1978 『鶴巻遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 6 集  
青木義脩 1981 『縄文時代前期終末から中期初頭の動向について』『埼玉考古』第 20 号  
青木文彦 2010 『岩槻城跡(二の丸第 3 地点)・黒谷貝塚前遺跡(第 1 地点)』さいたま市埋蔵文化財調査報告書第 5 集  
石坂俊郎・藤沼昌泰 2004 『後谷遺跡』第 1 分冊、桶川市教育委員会  
伊藤摩実 1984 『埼玉県内の縄文早期末葉～前期の主な貝塚分布について』『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』埼玉県立博物館  
今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』同成社

- 岩槻市役所市史編さん室・編 1983『岩槻市史』考古史料編、岩槻市
- 江坂輝弥 1954「海岸線の進退からみた日本の新石器時代」『科学朝日』14-3、朝日新聞社
- 近江哲 2012「縄文時代前期の搬入土器―埼玉県内における北白川下層式―」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第6号
- 近江哲 2014「興津式と、その以後―東関東における縄文時代前期末葉土器群の問題点―」『型式論の実践的研究Ⅱ』（『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』第276集）千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 大宮市立博物館 1983『収藏品図録 第1集 中川貝塚特集』大宮市立博物館
- 岡本東三 2012「沖ノ島海底遺跡の意味するもの―縄文海進と隆起現象のはざままで―」『考古学論叢Ⅰ』六一書房
- 奥野麦生 1987『タタラ山遺跡』白岡町タタラ山遺跡調査会報告
- 小倉均・柳田博之 1999『太田窪貝塚発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第255集
- 河合伸一・青木秀雄 2014『道仏北遺跡』宮代町文化財調査報告書第22集
- 川口市・編 1986『川口市史 考古編』
- 黒坂禎二ほか 2013『高木道下（C-99号）・高木道下北』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第406集
- 小坂延仁 2014『小谷場貝塚遺跡』川口市遺跡調査会報告 第45集
- 小林謙一 1991「東関東地方の縄文時代前期末葉段階の土器様相 ―側面圧痕土器及び全面縄文施文土器の編年的位置づけ―」『東邦考古』15 創部30周年記念論集、東邦考古学研究会
- 駒見佳容子・山田尚友・柳田博之 2007『大戸本村3号遺跡・大戸本村5号遺跡』さいたま市遺跡調査会報告書第61集
- 小宮山克己・櫻木悦子 1994『堀口遺跡』上尾市遺跡調査会報告書第12集
- 埼玉葛地区文化財担当者会 1999『埼玉葛の縄文前期』埼玉葛地区文化財担当者会報告書第3集
- 澤柳秀実『第25回企画展 さいたまの貝塚』さいたま市立博物館
- 庄野靖寿・鈴木敏昭 1978『掛貝塚』岩槻市文化財調査報告第7集
- 鈴木敏昭 1984『茶屋遺跡』白岡町埋蔵文化財発掘調査報告書2、白岡町教育委員会
- 鈴木敏昭 1991「土器群の変容―例えば、諸磯b式浮線文土器の場合―」『埼玉考古学論集』―設立10周年記念論文集―、埼玉県埋蔵文化財事業団
- 鈴木敏昭 2011「<土器にみる縄文人の思考>を考える」『埼玉県史跡の博物館紀要』第5号、埼玉県立さいたま史跡の博物館
- 関根慎二 2008「諸磯b式」『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション
- 高野博光 1973「大宮台地における浮島式土器の様相―とくに見沼周辺の資料より―」『埼玉考古』第11号
- 田代治・新井和之・笹森紀己子・小峰智仁・山形洋一 1999『上加遺跡（第2次調査）・中野林袋遺跡・茗花遺跡・指扇下戸遺跡（第2次調査）』大宮市教育委員会調査報告 第65集
- 田中和之ほか 1991『黒浜貝塚群 天神前遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集
- 田中和之 1996「蓮田市天神山遺跡出土の浮島・興津式系土器の位置づけ」『下津弘君・塚越哲也君追悼論文集 埼玉地域文化の研究』
- 細田勝 1991『在家』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第107集
- 細田勝・金子直行・赤石光資 1992「草創期・早期・前期」『上尾市史』第一巻 資料編1 原始・古代、上尾市
- 細田勝 1996a「白岡町タタラ山遺跡出土土器に関する覚書」『下津弘君・塚越哲也君追悼論文集 埼玉地域文化の研究』
- 細田勝 1996b「縄文時代前期末葉の様相 ―上尾市在家遺跡の調査から―」『上尾市史調査概報』第7号、上尾市教育委員会
- 細田勝 2005『徳力東北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第309集
- 堀口万吉 1986「埼玉県の地形と地質」『新編埼玉県史 別編3 自然』埼玉県
- 宮井英一 2010『前原／大沼』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第373集
- 松田光太郎 1992「浮島式土器の成立について ―東関東における縄文時代前記後半の土器文様の伝統―」『古代』第93号
- 松田光太郎 1993「諸磯a式土器の文様とその変遷」『古代文化』第45巻第6号
- 松田光太郎 1994「縄文時代前期後半諸磯b～c式土器（第Ⅲ群土器）の考察」『愛宕山遺跡 初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡』群馬県勢多村富士見村教育委員会
- 松田光太郎 2000「東関東における縄文前期末葉土器群の諸様相」『神奈川考古』第36号
- 松田光太郎 2008a「諸磯・浮島式土器の変遷と型式間の影響関係」『神奈川考古』第44号
- 松田光太郎 2008b「浮島・興津式」『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション
- 柳田博之ほか 1993『宮本遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第165集
- 山形洋一 1984a『鎌倉公園遺跡』大宮市遺跡調査会報告9、大宮市遺跡調査会
- 山形洋一 1984b『宮ヶ塔貝塚』大宮市遺跡調査会報告13、大宮市遺跡調査会
- 山田尚友 2005「さいたま市の諸磯期の集落（1）」『あらかわ』第8号、あらかわ考古談話会
- 山田尚友 2006「さいたま市の諸磯期の集落（2）」『あらかわ』第9号、あらかわ考古談話会
- 山田尚友 2008「さいたま市の諸磯期の集落（3）」『あらかわ』第11号、あらかわ考古談話会



(S=1/8、S\*=1/12)

第 14 図 大宮台地編年試案 (前期後葉)



(S=1/8, S\*=1/12)

第 15 図 大宮台地編年試案 (前期末葉)

山田尚友・小林寛子 2001『日向遺跡』さいたま市遺跡調査会報告書第2集  
吉川國男・下村克彦 1990「原始編」『北本市史』第3巻上 自然原始資料編  
多くの市町村史・遺跡報告書を参考にしたが、紙数制限のため引用文献にとどめた。

## 図の出典

- 第1図 堀口 1984
- 第2・3図 伊藤 1984 をベースに、参考文献により作成
- 第4図 松田 2008a
- 第5図 関根 2008、松田 2000、松田 2008a・b を参考に編集
- 第6図 田代・新井ほか 1999
- 第7図 青木ほか 2010
- 第8図 岩槻市役所 市史編さん室・編 1983、埼玉地区文化財担当者会 1999
- 第9図 田中ほか 1991
- 第10図 鈴木 1984
- 第11図 奥野 1987
- 第12図 河合・青木 2014
- 第13図 細田 1991
- 第14・15図 各報告書より掲載